学校だより 春蘭

１２月号①
2016.12.8(木)

文責　岩根小校長　佐藤勇人

叱り慣れる、叱られ慣れる

今週月曜日から個別懇談を実施していますが、保護者の皆様にはお忙しい中ご来校いただきありがとうございます。話し合ったことを今後の指導に生かしてまいります。何かありましたらいつでも学校にご連絡ください。

さて、いわゆる反抗期に入った子どもの扱いに苦慮されている親御さんをみると、これが親子の絆が一層深まる機会になればいいなあと、心から思います。

そうするために大切にしたいことは、「親としての自信」です。少しぐらい叱りすぎたって褒めすぎたって、甘すぎたって辛すぎたって、一般的教育論と違おうと他人が何と言おうと、親子なんだから、わが家の方針なんだから、親としての自信を子どもに見せながら対応することが大切だと思うのです。

「親に向かって生意気な口をきくな。」「家には家のやり方がある。」と頭から押さえ込むことがあってもいいし、「お母さん（お父さん）はそう思わない。」と理論で対抗してもいいし、「そんなふうに考えられるようになってうれしく思うよ。」と成長を喜ぶこともいいし…、叱りすぎたらいずれ褒めすぎるくらいの機会をつくり、あるいはその逆の対応に心がけ、一定の期間の子どもへの対応が、平均値でやや甘いくらいになっていればいいのだと思います。

反抗期の子どもに対しては叱ることが多くなります。これをうまくやっている親子は、親は叱り慣れ、子どもは叱られ慣れていることが多いようです。叱るというよりは「しつける」言葉を使い慣れていると言ったほうがよいのかもしれません。朝起きたら「おはよう」と言う、寝る時に「おやすみなさい」、そのほか「ありがとう」「行ってきます」「ただいま」、お客さんが来ている時の接し方等々、親は、子どもに命令したり行動を促したりする場合の言葉の使い方に慣れ、子どもは、それを聞いてどう対応したらよいのかに慣れているのです。これが権威ある親と、親を尊敬する子どもの会話の原型になっていくのです。

叱り、叱られ慣れていない親子の会話は、極端になりがちです。言葉が心まで傷つけるようになりかねません。反抗期になった時のことではなく、日常の親子の関係をどのように築くかを考えてみたいものです。

授業の改善に努めています

今年度本校は、テーマを「『確かな学力を育む学習指導方法の研究』～活用する力を育む算数科の授業づくりをめざして～」と設定して、授業実践を中心に研究に取り組んできました。

二学期にも、各学級で授業研究が行われましたが、今年度特に力を入れていることは、「児童一人一人に考える楽しさを味わわせる指導計画や学習過程」、「活用する力を育む学習過程の設定と算数的活動」、「学び合う場の設定」の３点です。低学年、中学年、高学年、特別支援の４つのブロックを主体としながら研究を進めています。

【９月】

↑　６年１組　9/5

６年２組9/7→（全体観察授業）

【10月】

↑春蘭１組
9/16

→２年３組
10/14
（全体観察授業）

→２年２組
10/4

【11月】

１年１組
11/15←

１年２組
11/24
↓

←３年２組
11/15

５年１組
11/29
↓

↑２年１組
10/24

→３年１組
11/9

↑５年２組
11/8

４年１組
11/11
←